この人

猪之頭区長として地域活性化を進める

佐野（さの） 順一（じゅんいち）さん （富士宮市）

人口減少が続く富士宮市北部の猪之頭地区では、新規移住者の受け入れに向けて体制を整えている。8月下旬に地区で開かれた恒例の「陣馬の滝まつり」では、内外から来場者を集めた。4月から現職を務め、地区代表として地域活性への一手を模索する。63歳。

―地区の現状は。

「現在、地元の井之頭小には43人、井之頭中は12人の生徒が通っている。近年、生徒数の減少は顕著だ。高齢化も進み厳しい状況だが、祭りには多くの来場があった。住民一同が協力し、地域を盛り上げるための方策を考えていく」

―活性への取り組みは。

「今夏、他県から新しく移住者家族3人を迎えた。ほかにも、首都圏からの移住希望者の問い合わせや視察がある。ただ、受け入れのための空き家の数や家屋の状態などを把握しきれていないのが現状。移住者の支援体制を強化したい」

―地域の魅力は。

「富士山の恵みを受けた湧き水と澄んだ空気はここならでは。富士山麓の豊かな自然は大きな強みだ。大自然の中でのバーベキューや地区内の山岳歩きなどを楽しむことができる」

―今後に向けて。

「これまで閉鎖的な面もあったが、攻めの姿勢に転じたい。猪之頭だけでなく市北部の朝霧高原エリアが一体となり、地域一帯をPRしていけたら」

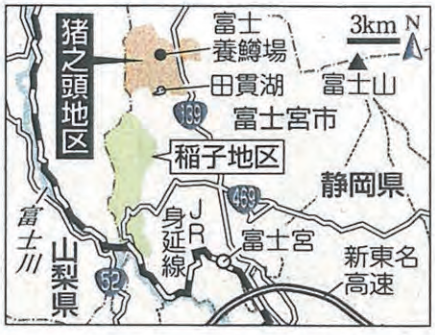
◇

地元の猪之頭郵便局長を務める。

※静岡新聞2016年10月1日（土）掲載

富士宮・猪之頭地区　希望者に空き家を紹介

住民パワーで移住促進



富士山の湧水を生かしたニジマス養殖が盛んな富士宮市猪之頭地区の住民有志が、若い世代を呼び込もうと「猪之頭地区活性化推進委員会」を結成した。移住者の受け入れで成果を挙げている稲子地区のノウハウを導入して、空き家や空き地を移住希望者に紹介していく。　（小佐野慧太）

移住希望者にとっての地区の魅力を考える地区住民ら＝富士宮市で

猪之頭地区は富士西麓の朝霧高原西側に位置し、三百四十世帯約九百人が暮らす。地元の小学校は児童数四十七人、中学校は生徒数十七人で、十数年で半減しているという。

地区内には県営の富士養鱒場をはじめ、民間の養鱒場が点在し、ニジマスを地域活性化の目玉にしてきた。だが、県有施設の和風レストラン「鱒の家」が経営難で二〇一四年三月に閉店。後継事業者を募っているが、選定は難航している。植松政臣区長(七〇)は「ニジマス頼みでは限界がある。水と自然の豊かさを武器に都市部の若い人を呼び込みたい」と話す。

モデルは、〇八年に稲子地区で発足した定住推進委員会。住民らが市と連携し、空き家の確保や紹介、移住者との交流行事の企画を担っている。これまでに七世帯二十人が移り住み、最少で五人だった地区の児童数も現在は十二人に増えた。

富士宮市未来企画課の担当者は「行政の依頼に空き家や空き地の提供をためらう所有者も、地元の顔見知りになら快諾するケースは多い」と話す。稲子地区で培ったノウハウを猪之頭地区で生かそうと、市側が組織の設置を持ち掛けた。

十九日夜の初会合には、地区役員と市職員の計九人が出席。移住者の住まいの確保や紹介だけでなく、組織として独自の活性化策を打ち出していく方針を確認した。植松区長は「大勢の子どもでにぎわう元気な地区にしたい」と期待をにじませた。

市は専用ホームページでの情報発信など移住希望者の窓口の役割を担う。市街化調整区域の規制緩和や、空き家の改修費の補助ができないかも検討していく。

区長「自然を武器に」

※中日新聞2016年1月21日（木）掲載

富士宮・猪之頭

「地域維持」へ活性化委

ネット活用 移住定住を推進

少子化が深刻化する富士宮市猪之頭で、住民と市でつくる「猪之頭地区活性化推進委員会」（委員長・植松政臣区長）が19日発足した。インターネットを活用して地域の魅力を発信し、子育て世代の移住定住を推進する。

猪之頭地区活性化に向けて意見交換する住民と市職員ら＝富士宮市の井之頭区民館

市未来企画課によると、井之頭中は全校生徒17人で、今春に3年生12人が卒業する。井之頭小6年生は11人いるが、全員が井之頭中に進むとは限らない。生徒数が多く、部活動などが盛んな他地区の中学校を進学先に選ぶケースもある。

猪之頭区によると、井之頭小も約60年前のピーク時に児童数250人を誇ったが、現在は47人にとどまる。植松委員長は「学校は地域コミュニティーの維持に欠かせない。少子化対策を喫緊かつ中長期的な課題として取り組む」と話す。

活性化委の男性住民7人と市職員は19日夜の初会合で、市が4月に開設する移住定住ポータルサイトを使い、自然環境に恵まれた子育て環境や空き家情報などを発信することを決めた。「若者や女性の考えを取り入れるべき」との意見があり、今後、活性化委のメンバー構成も検討する。

※静岡新聞2016年1月21日（木）掲載

Uターン、Iターン促進など 児童・生徒の増加へ

地域で活性化委員会立ち上げ

猪之頭地区

初の委員会であいさつする植松委員長

児童・生徒数の減少が顕著になっている富士宮市北部の猪之頭地区で19日、地区活性化推進委員会（委員長・植松政臣区長）が立ち上がった。市内では稲子地区に続く地域主体に実行する組織で、児童・生徒の増加に向けて地元若者のUターンやIターン（都会からの移住）を促し、若い世代を地域にとどめることにより、活力あふれる地域づくりを目指す。

今年度の井之頭小全校児童は47人、井之頭中全校生徒は17人。井之頭中は3月に12人が卒業し、4月から新入生を含めても全校生徒12人となる見通しという。子供が減少の一途をたどる中、猪之頭区では独自の英会話教育など地区の魅力向上へ数々の取り組みを行っているが、現状打開は簡単ではない。

人口減少対策は全国自治体の課題となっており、富士宮市でも人口減少克服を大きな柱としている。市では稲子地区の成功事例を基に、他地区でも独自の魅力を発信することでUターン、Iターンの促進を図っていくことを推進している。

稲子地区の例でも行政の押し付けではなく、地域の実情を踏まえ、地区が主体に考え実行することが必要で、猪之頭地区の思いを実現させる組織として、地区活性化委員会を創設した。

19日夜に井之頭区民館で行われた第1回委員会には委員として猪之頭区の植松区長（委員長）、佐野順一副区長（副委員長）、赤池陽会計、植松誠市書記、依田秀男第1町内会長、渡辺富重第2町内会長、植松秀行第3町内会長、市から未来企画課地域政策推進室の篠原晃信参事兼室長、芦沢昌洋主査が出席した。

植松委員長は「これまで独自に方策を考えてきたが、稲子地区の例を聞き、市の支援を受けながら委員会を主体として活力ある地域にしたい」とあいさつ。篠原室長は「地域を挙げて取り組んでもらえるのは市としても心強い。稲子地区のまねではなく、猪之頭地区独自のあり方を模索し進めてほしい。市は事務局としてサポートし、移住・定住施策にも力を入れたい」と述べた。

引き続き、篠原室長が人口減少時代の中での現状と課題、全国的な流れと市の対応、猪之頭地区の動きを整理した上で、活性化推進委員会創設の目的を説明した。

地域の魅力発信を提案

「地域の思い」に▽児童・生徒を増やしたい▽Uターン、Iターンの促進▽地区の魅力や資源を発信し、活力みなぎる地域づくりをしたい―を挙げ、「委員会が主体となって地域全体に活力がみなぎることを目標に行動する」とし、その手法として移住定住事業の実施、地域の魅力発信を提案。「地区に魅力を感じて来てくれる人を対象に地道に活動すること」を訴えた。

意見交換の中で委員からは▽働く場▽光ファイバー網の整備▽委員に若者や女性の参画―などの必要性が出された。「線引き」の問題を指摘する声も挙がったが、篠原室長は「現在の都市計画法の元で住居系施策の手法を考えるが、線引きに執着すると何も進まない。空き家の活用など、できることから進めたい」とした。

会議を終えて植松委員長は「組織が立ち上がったことは前進。市と連携して取り組む母体となり、今後、地区活性化のために自分たちに何ができるのか考えていきたい」と決意を新たにしていた。

※日刊岳南朝日2016年1月21日（木）掲載